

紹介

David Matza, *Becoming Deviant*, 1969, Part I. Prentice-Hall, Inc. Englewood Cliffs, New Jersey.

小野坂 弘

紹介 (小野坂)

151

かけている。本書に対しては、逸脱理論と社会的、経済的、思想的状況との関係づけがないこと、マッツァ自身の立場がいま一つはつきりしないこと、<sup>(3)</sup>「新シカゴ学派」に対する評価はまだ定着していないこと等から、一定の留保が必要である。とにか、マッツァの展開は見事である。

第一部は四章に分かれ、第一章は「自然主義」と「逸脱」の意味を明らかにする。第二―四章は「自然主義」の発展を三つの主要な社会学的見地(シカゴ学派、機能主義者、新シカゴ学派)を追求することを通して明らかにする。マッツァは社会学的見地の発展を「Correction→Appreciation」,「Pathology→Diversity」,「Simplicity→Complexity」という三つの枠組によって解明する。<sup>(5)</sup>

マッツァはいう。書く目的は一貫性を作り出すことである。一貫性が現実の混乱に押しつけられ、偽造が行われる危険がある。書くことは資料を一つにまとめること、又は組織的な形にすることであるから、この危険を避ける方法はない。業績について唯一の正当な質問は、押しつけ又は偽造の程度であり、その補償は面白さ、又は解明であると。

以下、本文は、とくにことわらない限り、マッツァのいって

一 本紹介は David Matza, *Becoming Deviant*, 1969 の第一部の逸脱理論の歴史的展開を扱う。本書は二部構成で、第二部は「逸脱者となる過程」について述べている(「Affinity」, 「Affiliation」, 「Signification」)。

著者マッツァはカリフォルニア大学、オークレー分校の教授で、Gresham Sykes との共同執筆の論文と有名な著書 *Delinquency and Drift*, 1964 によって知られている。マッツァは索引を入れて二〇三頁の本を書きあげたのに約二〇〇〇日も

いることの要約——論点の整理と紙数の関係で——である。註のうち、原註にもとづくものは(原)とする。

二 第一章では、まず、第一部の展開の組織原理、スペースタイプとして、「自然主義」(Naturalism)の觀念が解明される。普通、自然主義は「諸科学の成果と方法にもとづく哲学」(M. Farber)、「科学の哲学的一般化」(R. Peir)と考えられている。すなわち、支配的な見解によれば、自然主義は科学哲学、実験的方法と等しく、現象の客観的、外的又は観察可能な特徴を強調するもので、一般的には実証主義(positivism)と云うことである。しかし、このような見解は「科学主義」(scientism)と呼ばばよいし、そのように呼ばれて来ている。

自然主義は一つのコミットメント(commitment)であり、研究中の現象と現象の本質(nature)に誠実でありつづけようとする哲学的見解である。このことは、現象の体質が直ちに明らかであることを意味しない。それはしばしば論争中であるかも知れない。この論争の解決は体験又はより厳密な経験的方法にもとづかねばならない。便宜や他学科によって設定された有名な先例、いわんや現象の本質についての永遠の先入見によることはできない。このように考えると、自然主義は哲学的な一般

化の全ての形に対立する。自然主義の誠実さは世界に、いかなる程度の変化、又は普遍性が本来備っているかと、それを伴った世界に対してのものである。

ランダルの<sup>(6)</sup>自然主義の対立物として、まず、超自然主義を、最近では還元主義(reductionism)をあげる。ランダルの考え方を前提にすれば、自然主義の目的は、当該現象をそのまま(in integrity)を維持しながら一貫して表現することである。

自然主義の初期の成長期に、現象の本質を客体と考えたことは正当であった。当時の研究対象は概していえば、事実、客体であったから。「科学の哲学的見解」は、当時の研究に適していた。つまり、初期の自然主義は一つの真実——客観性——を存在の重要で遍在的な水準から推論したのである。従って、この時期の自然主義が体験、直感そして感情移入(empathy)の方法に反対したのは理解できるし、正当である。

混乱は初期自然主義にとつての真実(客観性)を一般化して、人間の研究にも扱げたときに生じた。この混乱の結果は、第一に、人間についての誤った考え方——予想された通りの「偽造」(falsification)——である。第二には、自然主義の意味の誤解である。人間を客体とする誤った考え方は、二つの主

要な形態の間で動搖している。一つはラジカルなもので、人間は客体であるとする。他方は発見的なもので (Heinrich)、人間が客体であるかのように行動することが、科学者の発見に役立つとする。どちらの考え方をとつても、同じ結果が生ずる。すなわち、人間の因果的能力、人間の活動、自分自身と自分の状況を反省する傾向、そして自分を形作り拘束していると称される状況に屈服せざるのり越えようとする人間の断続的努力を極小化するように、分析の術語が使用される。<sup>(7)</sup>

人間は有意味な活動に参加する。人間は自分の現実と自分の周囲の現実を積極的に、苦勞して創造する。人間は自然に——超自然的にはない——原因、力そして反作用の概念が容易に適用されうる存在領域をのり越える。自然主義は経験世界に誠実であることを要求するから、人間の自然主義的研究は選択の余地なく、人間を主体と考えねばならない。経験世界では、自分自身又は他の主体によって客体になぞらえられる場合の外は、人間は主体であつて客体ではないから。従つて、人間の研究においては、自然主義は科学的方法と、体験、直感そして感情移入というヒューマニズムに独特な手段とを結びつけねばならない。自然主義の経験世界への誠実さは、現世的なもの、平

凡なもの、俗悪なものをさへ、若干強調することになる。それ故に、自然主義は一つの重要な意味で反哲学的であつた。

しかし、不幸なことに、いかなる哲学も反哲学的であることに成功しえない。抽象し分類し、そして一般化する反対傾向は、一部は不可避だから生じたのである。そもそも物を書き報告する行為そのものが、著者を世界の翻訳 (translation) にコミットさせる。翻訳は一つのごまかしである。それは、 $\wedge$ 世界の活動の誠実な描写  $\vee$  という理想の単なる近似値で満足しなければならぬ。このように、反哲学的傾向は、自然主義精神そのものの内で、対立物に出会う。それにもかかわらず、反哲学は心にとめておくべきである。それは、哲学的傾向をコントロールし、規律するのに役立つからである。

逸脱 (Deviation) ここではノミナルな (nominal) 定義で充分であろう。そのためのもつとも良い典拠である標準的な辞典によれば、「逸脱する」とは、ある道又は基準から迷う (stray) ことである。道又は基準がどのようなものであれ、問題の現象がしばしば限界線にあることが容易に観察される。このような場合には、そもそも逸脱している、という命名そのものが疑わしい。この場合の困難は社会の本質にあるのであつて、逸脱の

概念にあるのではない。文化的な定義は、とくに今日の社会では、あいまいになる傾向がある。基準は変わるから、社会の構成員は明らかにあいまいな、又はある程度いい加減なマージナルな現象に対応することになる。社会の研究者はそのようなあいまいさに寛容でなければならぬ。たとえば、トップレスの服を着たウェイトレスは逸脱しているのであろうか。もし我々の逸脱概念が十分に厳密で操作的であるならば、明快な答が出せよう。しかし、明快な答は、この新しい現象のあいまいさと、この現象に対する最終的でない、動揺する、当てにならない対応を押しつけ、否定することによってのみ得られる。すなわち、逸脱概念の厳密さは、あいまいさと変化という、人をゆり動かす重要な社会的事実についての我々の見解を制限することによって達成される。多元社会においては、ある人間の逸脱は別の人間の慣習であるかも知れない。それが慣習でない人々の間でも、宗教上の伝統により、寛容のレベルが非常に違う。そのような社会では、ある種の現象は道徳的に複雑な問題であるとして、単純な分類が否定される。多元性という社会的事実も、それとともに生き、正しく評価されねばならない。厳密な定義のために避けることはできない。変化、あいまいさ、

そして多元性は逸脱概念自体に含まれている。そのため、逸脱のノミナルな概念さえも、限界では不正確で不明瞭なものになる。ある現象の道徳的地位に関する見解の相異の権威ある解決がない場合には、問題は未解決であるという以上にいうことは傲慢であり、無用でさえある。たとえば、サン・フランシスコにおけるトップレスを着たウェイトレスの場合のように、道徳的地位が少くとも合法性については解決されている場合でも、現象のあいまいさは、それに対する多元的ないい加減な対応と同様に残っている。

変化、あいまいさ、そして多元性の正しい評価は、一般道徳の観念の完全な否定を意味する必要はほとんどない。そのような推論は軽卒で、考えなしの相対主義の誤りである。多元的な評価、変化する基準そして道徳的あいまいさは、逸脱していると一般に感じられる、現象領域と共存しうるし、現に共存している。そもそも多元性という意味そのもの、変化とあいまいさの可能性自体が、普通行われる多くの企てが明白に逸脱していることについての広いコンセンサスにもとづいている。このように、多くの現象の逸脱性は、ほとんど問題にならない。盗人は——ジュネと彼を神聖視する人々を除けば——自分の行為を正

当化し、ある程度の専門性・職人意識を發展させている場合でも、盗みを信じていない。一般的で、多分自然の人間道徳と文化的相対主義の間を抽象的に選択する必要はない。

ノミナルな逸脱概念のこれ以上の論議は、何か神秘的なものと思わせるので、やめる。逸脱現象は社会生活のノーマルで不可避的な一部分であり、それらの非難・規制・禁止と同様である。逸脱は社会の觀念に内在している。法に身をゆだねることと、法に従わない可能性をつくりだすことは同じ事である。このことはデュルケームによって述べられ、それ以来社会学者の間で一般的に合意されている。<sup>(8)</sup>従って逸脱は特別の説明を必要としない。道から迷うことは道を歩くことにくらべて、理解しにくいことでも、当惑させることでもない。

三 第一章は“Correction and Appreciation”<sup>(9)</sup>と題されている。逸脱は定義上、一般に反Aであり非難される行為である。Aは研究対象が、行為・道徳の基準を侵害するものであるときは困難である。最近まで、逸脱の研究はCの視点に支配されて来た。Cは社会と逸脱者自身を逸脱のない状態にもどそうとする。研究も知識もそのためにある。この考え方は一般に受け入れられた考え方を反映している。

逸脱行動のAは伝統的な道徳判断を、少くとも一時的に停止することであるから、Aという立場は普通の基準からすれば、無責任と不合理という面をまぬがれない。Cの視点は対象に感情移入し(empathize)対象を理解する能力を損うところに、根本的欠点がある。Aと感情移入は、人間という主体の研究では欠くことのできないものである。これなしには、研究者と対象とのミゾが越え難いものとなる。Cの視点は一般の基準から見ても不快な特徴を抑圧する傾向があるが、これらの特徴が問題行動の本質的なものであるならば、否定・無視はできない。そもそも逸脱は、人間社会の本質的で、のがれ難い、活力ある一部なのである。

**改善の観点** Cは「原因論」に圧倒的な関心を示す。取りのぞくために、原因を明らかにせよと。記述と説明が厳格に分けられ、サザランド等の例外を別にすれば、現象そのものは傍に置き去りにされている。現象そのものへの嫌悪は記述に道徳基準を入りこませてしまう。

これらの点で典型的なものとして、第一次大戦前——Cの視点が全く批判されず、社会学と社会改良との結びつきが当然とされていた時代——の Russell Sage Foundation の二つの調

査<sup>(10)</sup>(以下RSFと略称)をあげよう。RSFの枠組は遵法市民のそれである——調査者は普通の市民ではなく、社会のもっとも道徳的な人々である——から、逸脱世界への踏み込みは、行われているけれども、おそろおそろである。逸脱者自身の見解ではなく、主に新聞記事、警察の書類、社会調査の報告によっている。現象に感情移入をせず、Aではなく、非難し、改善を望んでいる。RSFは今日の意識から見ると妙なことにこだわり、スラムを近代社会の病理的発達以外の何物でもないとする。つまり、犯罪等の個々の現象ではなく、スラム住民の子供の普通の活動そのものが病理現象と考えられている。逸脱世界の独自のまとまりも動きも、道徳問題の複雑さも理解されていない。RSFの結論は全く単純で「悪いことは悪い条件から生ずる」というものであり、パラドックスもアイロニーもない。△悪↓悪√の強調は、善とされていることから悪が、悪とされていることから善が生ずる可能性をおおい隠す(後述五参照)。

RSFはアウトサイダーの立場に立つ。

#### Aと主観的見解<sup>(11)</sup>

「シカゴ学派」は逸脱現象の自然主義的研究を行った、アメリカで最初のグループである。シカゴ学派の諸研究は逸脱現象に対するCの立場に立つ団体の援助によるも

のが多く、したがってその視点はCとAの混合と緊張を示している。その意味で、RSFとシカゴ学派の違いは程度とニューアンスの違いであるといえる。しかし、シカゴ学派は逸脱者の世界に深く踏み込むことよって、Aの視点に立つことができず、とくに現象そのものが非難されるものであり、Aが研究方法として確立していない場合には、対象の世界に踏み込むことは大切である。

現象のAとは、現象と現象を惹き起こす人々に——現象のまとまりをこわさないで——コミットすることである。研究者は、対象である主体の、状況の定義にコミットすることが必要になる。それは重大な決断である。もっとも、このことは研究者が常に、この状況の定義に賛成することを意味しない。対象主体の見解を明らかにし、理解し、世界を対象主体に見えるように、解釈することが目的である。このやり方による現象についての見解は、内部からのものである。

シカゴ学派の研究は勿論、逸脱世界を生態学的に根拠をもつ世界、固有の論理とまとまりをもつ特種な世界と考える。

#### Aと機能主義

「機能主義」(Functionalism)は、持続的な活動パターンは——逸脱的なものであれ、コンベンショナルな<sup>(12)</sup>

ものであれ——社会秩序に役立っているからこそ存続しているのであり、その意味で社会にとって機能的であるという。機能主義者は、社会秩序に対して肯定的な立場をとるのが普通であるために、するどく批判される。また機能主義の主たる貢献は「病理学」の放逐にある(後述四参照)。ここでは、機能主義がいかに自然主義的であり、シカゴ学派のAの立場を更に進めたかに注目する。但し、機能主義者のAは、シカゴ学派のように逸脱者の世界に踏み込まず、二次資料によって一定の距りを置いて行うもので、抽象的という。しかし、機能主義者のAも、内部からのものであり、逸脱現象は社会的にも心理的にも逸脱者に役立つと考え、その限度で「主体の見地」を採用する。ここでは、シカゴ学派にもっとも近い、ダニエル・ベル<sup>(13)</sup>をとりあげる。ベルはジャーナリスト出身の特色を生かして、逸脱者の世界に踏み込んで描いている。その意味でベルはシカゴ学派と機能主義をつないでいるといえる。また、ベルは逸脱現象のAを感情移入をもって行うが、その意味では、逸脱者としてしばしば同一視を行う新シカゴ学派と機能主義者との橋わたしの役割を果たす。

ベルは、汚職や荷役 racket の存在を非難する——それはア

ウトサイダの立場である——のではなく、その様な罪や悪徳が存在し続けることを理解しようとする。これは、まさしく機能主義の戦術であり論理である。現象のAはその現象の適当さと強さを注意深く考えることを可能にする。内部からの描写によって始めて、我々は真実をかいまみる。この真実はたしかに一方的かも知れないが、そこから始めなければ、逸脱現象の一貫性、形態、構造そして効用は明らかになりえない。

新シカゴ学派 Aは社会学の中である程度立場を確立したが、大抵の社会学者にとってAの日常的な形態は中立性、すなわち、Cの視点にも逸脱者にも感情移入をしないというものがある。従って、Aという態度の跡をたどるためには、かなり少数のグループに焦点をしぼることが必要である。それらの社会学者は、シカゴ学派と同様に直接の観察とフィールド・ワークを重視し、主体の見地の重要性を支持・拡大し、その他の点で逸脱現象のAを表明しているので——問題はあがるが——「新シカゴ学派」(The Neo Chicagoans)と呼びたい。この学派のテーマは逸脱者となる過程とこの過程の中で逸脱の公的登録が演ずる役割である。

ハワード・ベッカー<sup>(14)</sup>は、逸脱という概念そのものにとつて、

主体の見解がもつ意義を強調する。「アウトサイダー」は二重の意味をもつ。第一の意味はコンベンショナルなもので、逸脱者はアウトサイダーであると。第二の意味は逆であつて、コンベンショナルな人達は逸脱者の眼からみればアウトサイダーであると。ベッカーは見解の完全な分裂、正当性の完全な撤回、そして逸脱者の評価と見地を言葉通りに受けとるべきであるとはいっていない。逸脱者は意識的に相手方を誤らせたり、または無意識的に、自分自身をあざむいたり、自分の境遇を誤解するかも知れない。逸脱者が正直にものをいわないのは、たとえば逮捕をまぬがれるための自己防衛、他人が悲しい物語を期待していること、威厳と知恵のある人を馬鹿にしたい欲望にもとづく。

自然主義はある現象についてコンベンショナルな基準からみて不快な特徴を押えたりはしないが、主体の見地を人の良さと同視したりはしない。洗練された不信は現象の内部的見地のAと両立しないわけではない。正直にものをいわない人々のAは越え難い研究の障害ではない。判断を誤らされるのは主としてアウトサイダーであるから、研究者は好意をもったインサイダーとされるか、または自分の本当の正体を隠すことによつて、こ

の障害を克服しえよう。主体の見地の強調は、主体が特定の状況の下で、現象を特別の、独特の、または歪んだ見方でみているという観察を排除しない。彼等の状況が彼等を取りまく世界の諸局面を不明瞭にするように構造化されているのかもしれない。現象としては、そのようにみえることも、歪んでいることも、両方とも現実である。主体の見地は理解され、明らかにされねばならないが、神聖化されるべきではない。見られていることの実質とともに、見方の角度とその結果の屈折も考慮されねばならない。

新シカゴ学派は現象そのものの詳細な叙述に力点を置く。そして大抵の社会学者のように——逸脱を導くものとされる——社会的、個人的要素を位置づけることには関心をもたい。そもそもそのような要素の原因性をあまり信じていない。

逸脱者が自己の環境の中で観察され、彼等の活動が正しい文脈におかれ、主体のAがなされるとき、逸脱者は人間として考えられている。このような立場こそ、逸脱現象に対するCの視点からの研究が伝える理論的先入見をくつがえすのを助けるであろう。

四 第三章は「Pathology and Diversity」<sup>(17)</sup>と題される。Pの



概念は有機体の科学から一般化されたものであるから、有機体以下の、単なる物理的レベルではほとんど使われない。そこでPが有機体レベルをこえる現象を明らかにする能力を問題にすればよい。現象のまとまり、主体的存在のAを考えるならば、社会生活の自然主義的研究の基本的傾向は、Pの概念を批判し、ますます社会学の分野から追放するということである。Pは支持しえない、変形、変化であるが、問題の現象に参加している者にとって、その現象には、欠点、問題、不満がないわけではないが、充分に支持しうるように思われる。したがって、主体の見地のAは現象が支持しえないということに疑いをもたらす。逸脱現象は社会を住みにくいものにするということでPの概念を維持しようとする試みは、しばしば行われるが納得的でない。Pの概念は個人的レベルでも社会的レベルでも困難に出会いますが、今日でも多くの社会学者が陰に陽に、この概念を使っている。

Dの概念がPに対抗する。Dは支持しうる、変形、変化である。逸脱という概念は、ある種の変形は、支持しうるとして、禁止・規制・コントロールされることを認める。Dの概念と逸脱の概念は現実離れ(romanticize)されることがあり、し

かも、この現実離れが自然主義と取り違えられることがある。逸脱概念の現実離れは、主体の見地が顔面通りうけとられ、主体の見地からみれば、全く逸脱していないとされるときに生ずる。これはしばしば真実であり、したがって現実離れではないが、一般的道徳はそれを破る際にも認められるものである。

Dの現実離れの例をあげよう。妻が変わらず、夫が変わってばかりいる家庭を「女性をもとした連続的一夫一婦制家庭」の一例とすることは、現象にありもしない形態、意図、規則性を与え、現実離れの評価を与えるものである。Pの否定は現実離れした評価に行くことを必要としない。ある人間が不幸ならば、彼等はそのように呼ばれ、その不幸の性質が記述されればよい。不幸をPと描いて混乱をもち込むことはないが、その不幸を無視することにより、現象に本質的なことを失わせる必要もない。Pは逸脱現象の支持しうること、持続性を考えず、新しいことを創造し、Dを生み出す主体の能力を無視する。現実離れの方は現実世界の暗黒面、世俗面を不明瞭にして、快活さの底にあるストレスを不明にする。両者の根本的欠点は、現象に対して忠実でないことであり、現象を明らかにしえないこと。

自然主義者は勿論、現実離れを避けようとするけれども、主

たる努力は人間の研究からPの概念を排除することに向けられる。<sup>(16)</sup> Pの代りに、自然の変化、文化的多様性、規範的逸脱という考え方が生じた。逸脱の概念と変化またはDの概念との関係は——そうでなければ価値をおとしめる意味をもつ——認められよう。逸脱という概念を育てる知的な文脈は、Cの視点・制度の前提や目的に敵対するもの。

**シカゴ学派のデレンマ** シカゴ学派はコンベンショナルな道徳に深くコミットしていたので、PとDの間でデレンマにとらえられた。Pの概念を維持しながら、アメリカの都市生活のDの事実を記述すること。このデレンマの作業上の解決はPを個人レベルから社会のレベルに移す、社会解体の概念にみい出された。しかし、個人のPの完全な否定が行なわれたわけではない。大抵のその後の社会学者と同じく、パーソナリティとその障害の存在を認めている。ところがこの承認はしづしづののだったので、個人のPは概念体系中に確かな地位を占めていない。

シカゴ学派は対象に精通し、逸脱世界の社会組織を認識していたので、この世界のまとまりと自律の問題が起つたのは当然である。しかし、この問題に真正面から取り組むことはPとD

の選択を解決しなければならないことになる。そこで社会解体を考へることで、解決を避けたのである。すなわち、シカゴ学派は社会組織というところ、多かれ少なかれコンベンショナルなものであるという考えに執着したので、社会解体の概念によつた場合には、Dの事実は押えられた。逸脱的組織は、暗黙のうちに、コンベンショナルな社会組織の失敗に対する反応と考えられている。シカゴ学派ではDの事实在が記述され、Pの概念が認識されたのである。対立的概念が並存していた。とにかく、このやり方はDの事实在を選ぶことを後の社会学者に可能にした。しかし、デレンマは解決されなかつた。<sup>(17)</sup>

**概念 Paradox** Pは主体としての存在の領域に適用されるのは誤りであるが、一面の真理を反映している。Pの概念は科学の一般化の一部として人間の研究に移されたものであるが、人間の体験の現実、具体的な現象世界の何物かが、その移行を招いたのである。概念の概念は、そのような現実を指し示し、同時にPとDを主観的で人間的な言葉で統合することを可能にする。完全なDの概念は現実離れの傾向をもつ。たとえば、精神病はアウトサイダーのレッテル以外には、ほとんど、または全く実体をもたないという解釈に対しては、概念を伴う現象の特

徴のAが必要である。Pは体験を主体とほとんど関係しない言葉で述べることによって、現実離れのDは哀れな特徴を述べないことで、両者とも主観的体験の深さを極小化する。シカゴ学派は現象の哀れな特徴、とくに都会生活の孤独、匿名性、倦怠という主観的体験に注目し記述するが、これらの体験を人間的な概念にまとめあげようとせず、Pまたは社会解体の概念に扱ってはめようと試みた。

シカゴ学派は哀しい特徴を記述することでその後の社会学者が——種々の生活スタイルのいろいろな質と支持可能性のAを行う——Dの概念を展開することを可能にする礎石を置いた。

すなわち、シカゴ学派は情念の概念——それはPの概念に含まれている不幸と絶望に対する感受性を維持し高め、そして主観的体験と能力の極小化をさけることのできるもの——の発展の基礎を置いたのである。

シカゴ学派の都市生活者の「特徴」の描写は、都市生活の否定面、または最下層生活の理念型であって、社会学者が一般に誤解しているように、平均的または統計的意味の特徴ではない。勿論、シカゴ学派は、たとえば、部屋借住人の窮状が都市生活全体に及ぼす影きょうを認識していたが、この窮状を特定

の状況、区域に限定し、都市全体に無批判に拡げるつもりはなかった。とにかく、この特定の状況・区域の特徴は、哀れさの強調なしには述べるできない。悲しみ、孤独、不幸、くじかれた望みは、この状況で生活する人々が経験していることであるから、Pの概念とは違って、哀れさの強調は、アウトサイダーの言葉で述べることを意味しない。

伝統的な社会学は、シカゴ学派を誤解して、Pの概念の拒否とともに情念の現実をも見失った。シカゴ学派の不幸の過大視、満足的な面の過小評価を非難した。そして、哀れさの特徴を示す概念を無視した（他の者は、情念の考え方を近代社会全体に無批判に拡げてしまった）。

**機能主義とP** Pを研究するとは、身体の本質的欠陥に焦点を合わせることである。身体は、身体の知恵という角度から研究することができる。すなわち、有機体は自己矯正能力をもち、一見不愉快に見える身体的状態は挫折や消滅を避ける方法の一部として再構成される。機能主義のやり方はこれである。機能主義は——社会現象の分析における有効性については論争がある——P理論を前進させたか、くつがえしたのかを、理論的枠組と実際の叙述について考えてみよう。

たしかに、理論的には、機能主義は、ハワード・ベッカーがいうように、「逆機能」という新しい装いの下で、Pの概念を存続させた。身体の知恵と同時に、身体の愚かさも考えねばならないとされている。この点で機能主義者は保守的、不当に現状肯定的と批判されて来ている。しかし、逆機能は承認はされているが無視されているのである。逆機能は誰でも知っていることであって、これを強調することは知識に寄与しないと考えられている。つまり、機能主義は、理論的にはPの概念のための場所を用意できたのに、Pの概念を追放した。その理由は、機能主義者は愚かさに対する目がなく、顕在性に関心をもたなかったことにある。逆機能は顕在的なものである。機能主義は圧倒的に潜在的機能（意図されず、承認もされていない行動パターンの結果）に集中している。P概念の承認者のようにコンベンショナルな道徳を健康と同視せず、むしろ、無知・偏見・民族中心主義の貯蔵庫と見る。社会現象、とくに逸脱現象のコンベンショナルな基礎づけと結果は、もはや社会学理論に反映していない。新しい基礎づけと結果——つまり、逸脱現象の本質そのもの——が新しく発見されねばならないのである。犯罪とか非行とか、一般に悪いこと、ない方がよいとされている現象

の「機能」が強調される<sup>(18)</sup>。機能主義の批判者は、とくに、この驚きと新しさを好まず、沼地の社会的目的を理解しない人々であった。

マートンは、Cの考え方をなだめながら、「政治機構」(political machine)の潜在的機能を考える。政治機構は、それに反対する慣習、法律にもかかわらず、どのようにして生きのびるのか。マートンは、主として批判者に対して、機能主義は決して、身体の愚かさ気がついていないわけではない証拠として、理論を使う<sup>(19)</sup>。しかし、実践では、持続していることは機能の証拠であるという、機能主義による逸脱現象の分析に特徴的な仮定にもとづく。政治機構は存続している以上、何か機能を果している筈であると。

マートンは政治機構の機能をボスを中心に展開する。機能主義的分析の一般原則を形作る、二つの問題が考察される。第一は、道徳的に認められた構造が本質的な機能を果すことを困難または不可能にする、「構造的文脈」である。第二は、道徳的に承認されない機構が実際に果す潜在的機能以外には、その欲求が満たされない集団。構造的文脈は、政治組織を通じての権力の分散である。ボスは、この権力の断片を組織し、集中させ、よ

く働くように維持する。

マートンはいう。助けのいる人は機構によって、個人的で人間的な仕方では——官僚的で平等主義的で形式主義的なサービスをさける——助力をうる。機能は関係者に思いがけない助けを与え、コンベンショナルな道筋から排除されている人々に社会的移動性を用意することで、機会と出世というアメリカの夢に参与すると。このようにマートンは機構のサービスの性格を明らかにすることによって、その潜在的機能に注目させる。

しかし、公平に言えば、機構が用意するのは、社会的移動の別の道筋ではなく、思いがけない、公平でないチャンネルである。マートンは、提供される助力の思いがけない性格を無視し、その結果、このサービスが誰の犠牲で、用意されるかに関心を示さないことで、基本的事実を不明にする。機構は少数の者に思いがけない助力をするために、人種的な貧乏人の大多数を搾取するのである。すなわち、「誰が利益をうるか」は「誰の犠牲においてか」と一緒に考えねばならない。そうでないと、社会機構の愚かさ、その機構にゆだねられた人々の情念を見失う。

自然主義が進むにつれて、機能主義の記述・概念・枠組は問

題現象の弁明や矯正にすっかりした基礎を提供することを旨とするのではなく、その目的は——社会学の見解の政策決定者に対する影きようは別問題——ただ、現象を明らかにしようということであることが、ますますはつきりして来る。機能主義は善良で理性的な人々の間では疑いをもたれているが、機能主義はPの概念を実質的に追放する。更に重要なことは、機能主義が逸脱現象の現実の活動の研究を育てる、道徳的無邪気を支持することによって、自然主義を一層進めるふんい気を作り出したことである。

とはいっても、マートンの道徳的無邪気は限定されたものであった。つまり、憤激は一時的に放棄されるものにとすぎず、しかも、我々が怒っている事柄をより効果的になくするために放棄されるにすぎなかった。更にマートンの、逸脱現象の現実の活動、という概念は広すぎた。主たる注意は外的な活動又は広い社会的結果に向けられ、内的な活動には充分な注意が払われていない。新シカゴ学派とダニエル・ベルの業績では、機能の推定に、構造の記述または解剖が優越する。この逆転はマートンを越える道徳的無邪気を伴う。

**Pと新シカゴ学派** ある現象を病理的であると呼ぶこと、逸

脱をPと同視すること、ある人を逸脱者と表示すること (signification) は、新シカゴ学派のテーマである。しかし、Cの視点と新シカゴ学派の間には、テーマの展開の仕方において決定的な違いがある。前者にあつては、呼称・同視・表示は科学的分析者によって行われる作業であり、後者では、一般人によって行われる日常的な社会的作業である。新シカゴ学派はPの概念が証拠がある、または有用であるという考え方に強く反対する。Pの推定は世界の内で行われるから、社会的な結果を伴う。新シカゴ学派は、このラベル貼り、または汚名づけ (blaming or stigmatizing) の影をよみに極めて敏感であり、Cの立場に立つ人々と違ってP概念批判を逸脱者となる過程の理論化に取り込んだ。ここではPの概念が新シカゴ学派にどのように扱われたか見るにとどめる。<sup>(20)</sup> 新シカゴ学派はPの概念を機能主義者よりも強く、直接的に否定する。

エドウィン・レマートは言葉そのものは維持しているが、拒否しているのと実質的には同じである。Pという言葉のもつ、非科学的で道徳主義的な調子がよくないのである。ある現象を首尾一貫してPとする方法は存在しない。

アービング・ゴフマンの疑問は、社会生活の、二つの関連し

た特徴にもとづく。すなわち、行動についての判断基準のバリエーションと、ある基準を他の基準に対して選ぶことの既得利益を伴う党派性である。精神病院では、職員には病的と思われることが患者の下位文化ではノーマルであり、患者には変だ、または不適当なことが職員にとっては健康であることがある。つまり、職員は秩序と経歴に利害をもつから、自分にとって困った行動を病気の徴候と考える。病気の認識でさえ、徴候の文化的ステレオ・タイプにもとづく。ゴフマンは、全く奇妙な人間の間を抜く場合にさえ、Pを推定する能力を疑問視する。彼は機能主義者よりも明白に、Pに対立するDの概念をすすめる。Pの概念は、基本となるノーマルな体系を想定する。社会的な出来事では、正常性とはある状況に対する適当な対応である。ところが、まさしく、この正常性という概念が流動的である。なぜなら、種々の行動下位文化についての技術的地図はないから。適当な行動か否かは、判断者の文化・集団・利害の観点からなされるにすぎず、その意味で政治的となる傾向をもつと。

ハワード・ベッカーはP概念の有効性・有用性の否定において更に一歩を進める。逸脱現象については、何が健康な行動か

について一致がないから。新シカゴ学派の業績ではAの態度とDの強調が結びついている。更に新シカゴ学派の対象との密接な接触と直接観察の方法はPを完全に追放して、社会生活にはDだけが存在していると信ずる可能性と結びつく。逸脱主体の直接観察こそ、Cの視点からのPの推定に対する最良の防衛策であることをゴフマンもベッカーも知っていた。<sup>(21)</sup>

五 第四章の表題は、"Simplicity and Complexity"である。

社会学的洞察力は、個別的な現象を他の現象に関係づけて、又はより広い文脈で見られることを強調するが、これは物事をそのように見る生まれつきの、または訓練された能力を必要とする。ライト・ミルズによれば「社会学的想像力」とは、個人のもめ事と社会構造の間の関係を見る能力である。この種の洞察力は、たしかに社会学にとっては基本的ではあるが、自然主義の洞察力はもっと狭く、限定されたものである。自然主義者はコンベンショナルな現象と逸脱現象、善と悪、そして原因と結果の単純化された明白な区別に挑戦する。現実の社会的世界では逸脱現象とコンベンショナルな現象の区別は不明瞭で、複雑で、しばしば入りこんでいる。このことのAを要約する二つの概念がある。OとI<sup>(22)</sup>である。両者はともに社会学者の著述の内

に暗に含まれている考え方を明示したもので、現象を相互に並存し、浸透し合い、相互に形成し合うものとして見る能力に依存する。

Oは二つの相互に密接に関連するテーマ、すなわち、逸脱者とコンベンショナルな人々との間のマジナルな違いと、両文化のいろいろ程度は異なるけれども、かなりの相互浸透の強調に關している。両テーマとも、両世界の間人間並びにスタイル・格言の恒常的交換・交通・流れを指摘する。逸脱とコンベンションの区別は、したがって必要であるが、二つの領域間の動きの過程を認識したものでなければならぬ。たとえば、デユルケムがいうように自殺についての我々のイメージは、自殺が、他の社会領域と不可分の関係をもつことを認識するならば、全く違ったものになる。一見非常に違うように見える現象間に存在している類似性を見つければ、現象の見方は根本的に変わる。逸脱とコンベンションの厚い壁がこわれ、各々の世界の人間の性質は豊かなものになる。

Iの概念はOのそれから容易に生ずる。善悪の区別が疑問視され、両者の相互浸透が強調されるとすぐに、現象とその原因の關係についても同様な洞察が生まれる。Oは善悪両現象間の

複雑な關係を指すが、Iは善悪の間の複雑で驚くべき、順序、關係を指し示す。Iとは、適切な結果に対立する——そしてそれをあざ笑うかのような——事柄の状況または結果である。Iは悪は悪から生ずるといふCの見地を逆転させる。つまり、悪から善が、善から悪が生ずることもあるとする。ラインホルト・ニーバーはいふ。Iとは、一見人生における偶然の不一致のように見えるが、よく調べてみると、単なる偶然でないことが発見されることをいう。この発見がIを喜劇から区別する。Iの中心要素は潜在性、つまり、かくれた性質にもかかわらず、期待された結果をあざける成り行きに終る、現象の本来の性質である。潜在性はOにも起こる。

**シカゴ学派** シカゴ学派は逸脱世界とコンベンショナルな世界の分離を過大視しすぎた。未開人、逸脱者、下層階級に対して道徳と文化を否定した古い見解を正すためには、道徳的分離と下位文化的自律を強調することは有用であり、必要でさえあった。しかし、そのために、未開人と違つて、大抵の逸脱者はコンベンショナルなアメリカの文脈の中で生きていふという事実の意義を最小限にする傾向があつた。この傾向を強化したのは次の諸点である。未開部族についての人類学的な考え方の無

批判な転用。研究対象に集中しすぎたため、人々との間の交流、社会的移動を過少に考えること。構成員の頻繁な交替の意義を考へることに失敗した、逸脱世界についての静的な見解。これらはずべて、主体自身の物語にあまりに依存しすぎた結果である。つまり、逸脱主体が、自分自身をコンベンショナルな世界から切り離され、参加することに永久に不適当または無関心であると考えたことは有意味であり、彼等は自分自身を複雑な過程にあるものとは見ない。この主体の見地を現実と同視すべきではない。逸脱者の大抵は逸脱世界を去り、落着き、結婚する。これは、多くの逸脱現象にみられる、ごく普通の事実である。社会生活の研究者は、現実の人間の錯綜した経歴をより完全にみなければならぬ。しばしば、生活のスタイルも実質も、人生のサイクルの間に変る。

逸脱者の世界は一種類だけの世界ではなく、いろいろな逸脱者が集まる。このことはシカゴ学派によつて指摘されている。更に一層重要なことは、逸脱者は、別の社会的文脈においては賞賛に価する人々と、性格、素質の点で同じであることが、ますます認められていることである。このようにOはシカゴ学派によつて指摘されたが、ほとんど重視されなかつた。



シカゴ学派のIは陳腐化したものであった。すなわち、植民地時代からアメリカ人の間に存在していた、都市生活への不信がそれであった。中心的なIが陳腐化していることはそのIが本当でなく、誤り導くことを意味しない。しかし、Iとしては迫力がない。したがって、シカゴ学派は逸脱と社会の関係についての自然主義的見解を促進するものとしては重要でない。Cの視点と両立しないわけではない伝統的な言葉でみていた。両棲の關係の洞察をすすめるためには、Oは一層はつきりと認められ、Iは一層強力で、驚くべきもので、しかも特殊なものなければならなかった。

#### 機能主義<sup>(2)</sup>

機能主義者はシカゴ学派ほど主体に焦点を合わせず、潜在性を強調し、先行者の觀察にもとづくことができたので、社会学的洞察力においてより完全であり、周辺の認識においてはより適切であった。機能主義者はOとIを逸脱世界の概念的翻訳と逸脱世界のより広い社会的文脈に対して関係づける点において秀れていた。

Cの視点が少しでも残っている間は、コンベンショナルな現象と逸脱現象の複雑な關係は概念的または理論的卓越を獲得できなかつた。概念的障害がとり除かれるまでは、両現象の歴然

たる類似性はぼかされていた。類似性を明らかにすることは、違いを放逐することを意味しないが、最小限化する。両現象の類似性を指摘する動機の一部は、両者をより慎重に区別することである。キングスレイ・デービスは、売春とコンベンショナルな性的取引の重要な類似性を、本質的な違いを位置づけるために特定した。デービスによれば、売春とコンベンショナルな性的取引の違いは、両者の類似性を指摘した後にはのみ明らかになる。売春の社会的非難の理由はどこにあるのか。性的な好みの取引、性的行為に対する感情的無関心という点では両者に本質的な違いはない。売春の非難と普通の女性の性的な操作の承認は、売春婦が取引するやり方にもとづく。つまり、売春婦は、誰かれの見さかしくなく取引する。売春婦は性交毎に金銭その他の有価物をうけとる。売春婦は性的快楽にも相手にも無関心である。これは性關係の純粹な商業化を反映している。売春の非難はとくに、性的行為が男との安定した社会關係——再生産が公けに承認される關係——に結びつかないことにもとづく。売春とコンベンショナルな性的關係は、重要な違いがあるというだけではぼかされない、基本的連続性がある。

逸脱現象の機能主義的分析の中で、Oへのもつとも明瞭な関

心をもち、Oを分析の中心概念とするのはベルである。ベルはいう。犯罪は広い文脈で見なければ、ほとんど理解できない。

犯罪はアメリカ生活のコンベンショナルな関心や要素と深い関係をもつ。組織犯罪のスタイルは企業のやり方に、やや遅れて従う。犯罪制度は、合法企業の合理化を反映して近代化される。禁酒・売春の衰退と分散化、産業ラケットの終り、薬物の経済的限界のために、一九四〇年代には賭博が組織犯罪の主要な商品となった。賭博業は不法産業の前衛として、時代遅れの方法を一掃する技術と組織を生み出した。賭博は地下世界の活動の方法を革命した。ベルは合法企業と不法産業の実体的、形態的類似性を、Oを強調した。それに対応して、逸脱商品に対する個人的対応もはっきりせず、変りやすく、アンビバレントであることを示している。Oは結局、世論が問題現象を道徳的に認識する際に示す不確かさと分裂に表われる。ベルはコンセンサスの欠如と個人のアンビバレンスを指摘している。

機能主義者はOに対しては——ベルを別にすれば——I程には熱心でない。Iこそ、機能主義的分析の中心の特徴である。

それは潜在的機能と身体の知恵の重視と合致する。マートンはアメリカの徳「大志」がある状況の下では、アメリカの悪徳

「逸脱行動」を促すことを指摘した。下層階級は一方では行動を富の獲得に向けよといわれ、他方では制度的にそうする機会を大部分否定されている。大志は、それが制度的に挫折されている時には逸脱を促す。反対物を生み出し、徳をあげざる大志の潜在的特徴は社会移動に対する階級的障害・制限の現実である。大志の目的とは障害・制限の克服であるから、障害・制限は大志の概念に内在している。

ベルはいう。組織犯罪という悪徳は、いかがわしいけれども、尊敬される社会的地位を手に入れ、社会的移動を行う梯子——潜在的な徳——である。凶暴な産業を組織化し安定させるために組織的ラケットがはたした役割を考えねばならない。公的機関が安定機能をはたすようになると、サービスであったものが純粋な強奪となり、警察行動が要求されるようになる。ラケットのIがなくなったのである。ラケットのIについても、徳は必要なサービスについて悪徳に依存することで道徳的に妥協させられているだけでなく、そのサービスに法外な代価を支払うことで、二重にあざけられているといえる。

機能主義者のIは深いものではないが、皮相でも陳腐でもない。シカゴ学派にくらべれば新鮮で特殊である。新シカゴ学派

にとつてはIはより一層特殊化し、驚きの要素が更に強くなつた。中心的Iは原因理論の主要な輪かくを示唆している。

**新シカゴ学派** 新シカゴ学派のIは統制の体制と機関が、他人が逸脱者となる過程にかかわっていることである。すなわち、Pをもつと考えられる人々を予防・介入・逮捕・治療する努力そのものが、社会がそれに対して身を守る傾向を生ぜしめ、またはひどく悪化させるのである。つまり、新シカゴ学派のIは逸脱の概念及び人が逸脱者となる過程の理論と溶け合っている。このIによつて、従来は不完全であつたこの過程についての体系が完成する。逸脱に向けられた制度は、自分の担当した者が逸脱者となる過程に深くまきこまれてゐる。被担当者は、この制度を通過するまでは、これらの機関に処置されてゐない人達とはマージナルにしか違つてゐない。違う場合でも、大した違いではない。このように、新シカゴ学派は規制制度・組織が、規制される人々の人生を形成する点で演ずる中心的役割を強調し、個人的性格を生み出した一般的环境は、これらの制度を含むことになつた。

新シカゴ学派は逸脱を公けにすること、人々にラベルを貼る、または汚名づけることの重要性を確信して、レマートに従

い「二次的逸脱」(secondary deviation)を強調する。二次的逸脱とは人々が、逸脱に対する社会関係的(societal)反応によつて作り出された問題への防衛、攻撃または適応の手段として、自分の逸脱行動またはそれにもとづく役割を使い始める状況である。逸脱者となることは主として、二次的逸脱——すなわち、発見され表示された逸脱を中心に人生を組織すること——に関する。新シカゴ学派の選別と表示の強調は、認知されない逸脱——表示されず、発見されないままである逸脱——が普通に存在しはこびこつてゐると考えなければ、ほとんど意味がない。認知されない逸脱を「一次的逸脱」(primary deviation)(レマート)と呼ぶ。新シカゴ学派は象徴的には「社会的に受け入れられている役割の付属物」と定義され続ける、逸脱の遍在性とありふれた性格について、先例のAを展開した。社会関係的反応までは、逸脱は逸脱と認識されずに済んでしまう。逸脱は主としてコンベンショナルな文脈の中で行われ、見ずくし、または寛大な傾向により自他ともにコンベンショナルと判定される。社会関係的反応の後では、社会的傾向は逆転し、コンベンショナルな要素は看過され、逸脱者という判定が支配的となる。新シカゴ学派は一次的逸脱は社会に満ち満ちてゐると

考へ、世界の概念的翻訳の中心に位置づけた。勿論、このことは、社会の諸部分で異なつた素質・気性をもつ人々の間で平均に存在していることを意味しない。コンベンショナルな、評判のよい人が、しばしば逸脱行動を行う。ベッカーはいう。逸脱行為を犯した者だけが、実際にそうしたい衝動をもつと考える理由はない。大抵の人は、しばしば逸脱衝動を体験するのではないか。少くとも空想上では、人々は、彼等が思われているよりもずっと逸脱的であると。OのAは、逸脱現象のコンベンショナルな局面と、逸脱生活でのコンベンショナルな幕間に対する知識・注意をとりもどすことである。

新シカゴ学派は、逸脱現象の量と分布について公式統計をほとんど信用しない。公式統計を信ずることは、一次的逸脱の遍在を信じないことであるから。新シカゴ学派は、公式統計の見積りそのものを推定と説明の対象とする。このような逆転は、彼等のIと全く一致する。それはまた新シカゴ学派の制度論者の傾向を明らかにする。逸脱の規制と登録をまかされている制度の性格・特徴が、研究の主要問題となるのである。彼等の見解では、逸脱の量と分布の公式見積りの説明は、逸脱を育てる状態と登録の方法・前提にみい出される。

レマートは、デービスの売春の研究にもとづき、売春の三つの特徴——すなわち、性的好意を物質的報酬と交換すること、多かれ少なかれ無差別に多くの人とふけること、肉体的行為から深い感情が分離していること——をあげる。そしてこの三要素は、主として男の活動である専門職の中心要素であるという。つまり、サービスを料金引替に与えること、顧客の選択に差別がないこと（普遍性）、そして、与えられるサービスから深い感情の分離（感情的中立性）。この類似性は驚くべきことではない。売春は最古の専門職の一つであり、専門職にある者は常に自分を売ることを恐れている。

自然主義の洞察力は世界をあるがままに明らかにしようと努める。世界に存在しているものは複雑であるから、誠実さはその複雑さを維持した翻訳を要求する。とくに機能主義と新シカゴ学派のOとIは、逸脱現象の複雑なイメージに貢献した。<sup>(24)</sup> アルバート・コーエン<sup>(25)</sup>は両者のIを結びつけ、社会解体から生ずる逸脱の集団化に沿つて考えることによつて両者を正しい文脈に置く。新シカゴ学派はシカゴ学派から発し、それに負っている。遺産のAがなされるならば、シカゴ学派の限界は越えられ、予想される欠点は決して現実化しないであらう。

註

(一) G. Sykes and D. Matza, "Techniques of Neutralization: A Theory of Delinquency", American Sociological Review, 1957, vol. 22; D. Matza and G. Sykes, "Juvenile Delinquency and Subterranean Values", American Sociological Review, 1961, vol. 26.

(二) 小野坂 介, cf. J. H. Skolnick, "Perspectives on Law and Order", in: S. F. Sylvester, Jr. & E. Sagarin (ed.), Politics and Crime, 1974, pp. 6-16; G. Sykes, "The Rise of Critical Criminology", Journal of Criminal Law and Criminology, 1974, vol. 65, pp. 206-213.

小野坂 介, A. Gouldner, The Coming Crisis of Western Sociology, 1972.

(三) cf. R. S. Deniroff & C. H. McCaughey (ed.), Deviance, Conflict, and Criminology, 1973; C. E. Reardon (ed.), The Criminologist: Crime and the Criminal, 1974.

(四) E. M. Schur, Labeling deviant behavior: Its sociological implications, 1971. P. K. Manning, "Deviance and Dogma", British Journal of Criminology, 1975,

vol. 15, pp. 1-20. 新シカゴ学派」に  
「トーマス・ロースト学派」の  
E. M. Lemert, Human Deviance, Social Problems, and Social Control, 2nd ed., 1972, p. 15.)

(五) Individual Treatment → Liberal reform  
→ Radical Nonintervention → 社会  
E. M. Schur, Radical Nonintervention, 1973. 社会の  
John H. Randall, Jr., "The Nature of Naturalism",

in: Y. H. Krikorian (ed.), Naturalism and the Human Spirit, 1944, pp. 354-382; cf. Herbert Blumer, "Sociological Implications of the Thought of George Herbert Mead", AJS, LXXI, 1966, pp. 535-547. (英)

(六) cf. Max Weber, The Theory of Social and Economic Organization, 1964, pp. 88-114; George Herbert Mead, Mind, Self and Society, 1934; Robert Maclver, Social Causation, 1942. cf. Donald Cressey, "The Language of Set Theory and Differential Association", Journal of Research in Crime and Delinquency, 1966, p. 26. (英)

(8) 参照、小野坂弘「犯罪の常態性について」法政理論三卷一四三頁以下。

(9) Correction が「改善、矯正」として一般に使われることは意味が異なることは言うまでもなく。Appreciation が「ミカユ学派—機能主義者—新シカゴ学派」の全体的について、全く同じ意味をもつとは思われない。このことは「マッシュ」の叙述を追って明かされる。「事例のありのままの認識」ということが全ての場合に中心的な意味であるから、Correction 離れが段々と強まる。以下、本文で Correction を C. Appreciation と A と略称する。

(9) West Side Studies, 1914; The Pittsburgh Survey, ed., Paul Kellog, 1914. (原)

(11) 本書では頁数をたいて「The Hobe as Subjekt」(Neils Anderson, The Hobe, 1923 以下)を説くところから、本紹介では「ホブ」をたいておく。

(12) conventional は普通「因循的」なことを説くために、適切な訳語とは考えにく。この deviant と対比して使われている。したがって、「逆説的にながら、普通一般人の」立場を意味する。

(13) Daniel Bell, "Crime as an American Way of Life", "The Racket-Ridden Longshoremen", in: End of Ideology, 1960. cf., "The Myth of Crime Wave", in: op. cit. (原)

(14) Howard Becker, Outsiders, 1963. cf., Edwin Lemert, Social pathology, 1951; Erving Goffman, Presentation of Self in Everyday Life, 1959 and Stigma, 1963. (原)

(15) Pathology は「異常」Diversity は「多様性」を意味する。以下本文では各々 P、D と略称する。

(16) cf., K. Davis, "Mental Hygiene and the Class Structure", Psychiatry, I, 1938, pp. 55—65; C. Wright Mills, "The Professional Ideology of Social Pathologists", AJS, XLIX, 1943, pp. 165—180. 以下は本誌では Harold Falling, "Functional Analysis in Sociology", ASR, XXNI, 1963, pp. 5—13. 原は参照のりやあとの「G. Jaeger & P. Selznick, "A Normative Theory of Culture", ASR, XXIX, 1964, pp. 653—669. (原)

(17) cf., Walter Miller, "Lower Class Culture as a Generating Milieu of Gang Delinquency", Journal of Social Issues, XIV, 1958, pp. 5—19; Richard Cloward & L. Ohlin,

Delinquency and Opportunity, 1960; E. Goffman, Asylums;

Whyte, Street Corner Society, 1943. (英)

(29) cf. Robert Merton, Social Theory and Social Str-

ucture, 1957; Harold Sampson, Sheldon Messinger et al,

"The Mental Hospital and Marital Family Ties", in: H.

Becker (ed.), The Other Side, 1964; E. Goffman, Asylums,

1961; Thomas Scheff, Being Mentally Ill, 1966. (英)

(30) R. Merton, "Social Problems and Sociological The-

ory", R. Merton & Robert Nisbet (ed.), Contemporary Social

Problems, 2nd ed., 1966, pp. 817—823. cf., Walter Cannon,

The Wisdom of the Body, 1939; Dickinson W. Richards,

"Homeostasis Versus Hyperexis: or Saint George and the

Dragon", The Scientific Monthly, LXXVII, 1953, pp. 289—

294. (英)

(31) 本欄の意義は「Signification」の意義に於て

と云ふこと。

(32) E. Lemert, "Some Aspects of a General Theory

of Sociopathic Behavior", Proceedings of the Pacific So-

ciological Society, 1948, XVI, No.1, pp.24—25; E. Goffman,

Asylums; H. Becker, Outsiders. (英)

(33) Overlap (重複) 一は Irony (不 coinciding) の

意味。

(34) cf. Eric McKittrick, "The Study of Corruption",

Political Science Quarterly, LXXII, 1957; Kinglay Davis,

"Prostitution", in: Merton & Nisbet (ed.), Contemporary

Social Problems, 1961; D. Bell, "Crime as an American

Way of Life", and "The Racket-Ridden Lengshorem",

in: End of Ideology. (英)

(35) cf. Goffman, Asylums; Lemert, op. cit., 1948 and

Social Pathology; Becker, Outsiders; Matza, Delinquency

and Drift, 1964; Mary Owen Cameron, The Booster and

the Snitch, 1964. (英)

(36) A. Cohen, "The Study of Social Disorganization

and Deviant Behavior", in: Merton, L. Broom & L. Cottrell

(eds.), Sociology Today, 1959 and "The Sociology of the

Deviant Act", ASR, XXX, 1965, pp. 5—14. (英)